

肌が触れ合う癒やし



(産経新聞写真報道局 瀧誠四郎撮影)

「人は喜ぶものです」
深井さんによると、欧米では
アーティストの表現手段として

「アートです」

今年5月、米フロリダ州で開かれた「フェイス&ボディアーティスト・インターナショナル・コンベンション」のチークアート部門で頂点に輝いた。「世界中からアーティストが集まるイベントで、日本でもいざれという大会をやりたいと視察の目的で初参加したのですが、まさか優勝するとは思わなかった。閉会式で名前が呼ばれたときは感激しました」と、横浜市金沢区

深井仁美さん

フェイスアーティスト関連会社「デコデコ」を経営する深井仁美さんは振り返る。ちなみにチークアートとは、部分的にペイントするワンポイントアートのことだ。

今でこそサッカーのサポーターらが国旗などをほっぺに描いたりして知られるようになってきたが、深井さんが1999年にフェイスペイントを始めたときは、日本でやっている人はほ

んどいなかった。きっかけは、ネイルアートの仕事をしていたとき、いきなり野毛大道装に出ないかと誘われたことだった。

「フェイスペイントの芸人が

来日できなくなったらしくて、

外国の本を参考にしよう見まね

で勉強して妹と2人で始めたん

です。最初はお客さんもほとん

ど来なかったけど、2002年

のサッカーW杯のときは1日で

3000〜4000人に描いて

ましたね」

現在は6人の社員のほか20人

以上の登録アーティストを抱え、各地のイベントに派遣したり、セミナーを開いたりしている。さらにフェイスペイントの普及を目的にNPO法人日本フェイスペイント協会を設立。9月には第1回のフェイスペイント検定を行う予定だ。

「プロを目指す人が増えてくればいいなと思って。でも一方で、小さいお子さんを抱えたお母さんたちが気軽にフェイスペイントをやってほしいとも思

う。上手じゃなくても星やお花を顔に描いてあげると、お子さ

認知されているフェイスペイントだが、日本では全く別の可能性もあるという。イベント会場で企業のロゴなどを多くの人の顔に描くことで、広告の代わりにもなるのだ。

「欧米では描かれる側も個人的な絵を望むけれど、日本人は恥ずかしがり屋だからみんなと同じ図柄でないといやという部分がある。フェイスペイントは、描く方は楽しいし、描かれる方はうれいし、それに肌と

肌がふれあうことで癒やされる。いろんな部分で魅力的な

フェイスペイントアーティスト

※リマーニ (RIMANI) はギリシャ語で「港」の意味です。